

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

広西省玉林市における客家意識と客家文化： 土着住民と帰国華僑を対象とする予備的考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 洋尚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5595

広西省玉林市における 客家意識と客家文化

— 土着住民と帰国華僑を対象とする予備的考察 —

河合洋尚

摘要 : 迄今为止日本的人类学家很少关注中国西南部的客家及其文化。本文根据笔者在玉林市的田野考察讨论广西客家的认同感以及文化, 从而提出广西客家认同的变动性以及广西客家文化与广东客家文化的“文化逆转”现象。

キーワード : 客家 地佬 帰国華僑 文化の逆転現象 広西省

客家は、世界各地に居住する漢族のサブ・エスニック集団であるが、その多くは、香港、台湾を含めた中国東南部に居住している。それゆえ、文化人類学では、香港、台湾、福建省、広東省、海南省など東南部における調査研究が圧倒的に

多いものの、例えば中国西南部の客家にまつわる調査はまだ十分に進められていない⁽¹⁾。こうした状況を鑑みて、筆者は2012年2月27日から3月5日にかけて、広西省最大の客家居住地である玉林市で短期のフィールドワークを実施した。本稿は、その調査データに基づき、玉林市の客家意識と客家文化を考察することで、広西省および中国西南部の客家の一端を紹介する。その前に、広西省の客家について概観することにしよう。

1. 広西客家の人口と分布

中国西南部には、広西省、貴州省、四川省、雲南省、チベット自治省などがあるが、なかでも客家が相対的に多いと現在考えられているのは、広西省と四川省である。そのうち広西省には900万人以上の客家がおり、全省人口の10%強を占めると考えられている⁽²⁾。他方で、四川省は、成都郊外と東南部を中心に100万余りの客家を抱えるとされており⁽³⁾、全省人口の約1.1%に相当する。このように見ると、中国西南部で客家が最も多く、高い比率で居住するのは疑いなく広西省である。

それでは、客家は広西省のどこに分布しているのだろうか。鍾文典が著した『広西客家』によると、広西省には、ほぼ100%の人口が客家である「純客家県」は存在しない。

(1) ただし、金裕美が、広西省北部の三江トン族自治県にて先駆的な調査を行っている。詳しくは、金裕美「少数民族自治県の漢族」瀬川昌久・飯島典子編『客家の創生と再生——歴史と空間からの総合的再検討』風響社（2012年）を参照のこと。

(2) 鍾文典『広西客家』広西師範大学出版社、2011年、91頁。

(3) 劉鎮発『「客家」——誤解の歴史、歴史的誤解』学術研究叢書、2011年、90頁。

同省では、客家は全域に分布している。ただし、全体を見渡すと、客家は、東部に多く西部に少ない傾向がある。具体的な数値で言うと、客家の人口が最も多いのは、東南部の玉林市であり、特に同市の博白県には約 85 万人、陸川県には約 50 万人の客家がいる。また、博白県で客家が占める割合は約 65%、陸川県で客家が占める割合は約 69% となっている。その他、南部に位置する防城港の市区と東興市では約 50%、東北部の賀州市八步区では約 41%、中部の柳州市柳城県では約 38%、貴港市では約 35% が、客家で占められている。ただし、その反面、西部の河池市と百色市では、1 県（河池市管轄の羅城県）を除き、全ての区／県で、客家の割合が 3% を下回っている⁽⁴⁾。

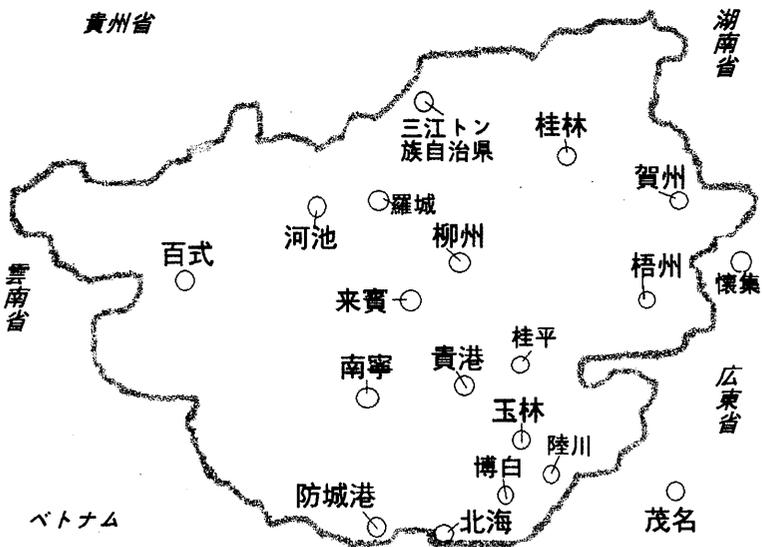


図 1：広西省地図

(4) 鍾文典『広西客家』広西師範大学出版社、2011 年、59-88 頁。

鍾文典の同書によると、広西省における客家の起源は、紀元前219年、秦軍が50万の兵を引き連れて嶺南に入り、桂林、象、南海の三郡を置いた時まで遡れるという⁽⁵⁾。また、客家の祖先が広西省に大量に移住してきたのは、明・清期であり、主に広東省、福建省、江西省から移入した。

広西省の客家について言及する際に気をつけなければならないのは、果たして誰が客家であるのかという問題である。上記は、現在のほぼ公的見解となっている鍾文典の説を引用したが、広西省における客家の人口と比率にはズレが存在する。例えば、2011年に出版された『広西客家』では、広西省の客家人口が900万人と記されているが、同年に徐天河が著した『客家文化与和諧広西』では、同省の人口は700万人であるとしている。また、『広西客家』は客家が80余りの県／区に分布しているとみなしているが、『客家文化与和諧広西』は100余りの県／区に分布と記している⁽⁶⁾。

このような違いは、1933年に羅香林が出版した『客家研究導論』と比べると、さらに顕著である。羅香林は、広西省における客家の分布として13の県／区しか挙げておらず、その全てが「二級客住県」、すなわち客家の全県に占める比率が約30%の地区であると考えていた。羅香林が挙げた13の「二級客住県」を挙げると以下の表の通りとなる。

(5) 鍾文典『広西客家』広西師範大学出版社、2011年、11頁。

(6) 徐天河『客家文化与和諧広西』浙江大学出版社、2011年、7頁。

地区名	現在の呼称	現在の管轄市と位置	比率	現在の見解
賀 県	八歩区	賀州市の中央部	約 30%	41.00%
藤 県	藤 県	梧州市の西部	約 30%	1.30%
柳 城	柳城県	柳州市の北部	約 30%	38.00%
馬 平	—	現在の柳州市内か？	約 30%	13.70%
象 県	象州県	来貧市の東北部	約 30%	6.70%
武 宜	武宜県	来貧市の東部	約 30%	24.00%
桂 平	桂平県	貴港市の東北部	約 30%	10.74%
平 南	平南県	貴港市の東北部	約 30%	13.50%
貴 県	貴港市区	貴港市の中心地	約 30%	35.00%
博 白	博白県	玉林市の東南部	約 30%	64.64%
郁 林	玉林市区	玉林市の中心地	約 30%	—
陸 川	陸川県	玉林市の東南部	約 30%	69.00%
北 流	北流県	玉林市の東部	約 30%	14.00%

表 1：羅香林による広西客家の分布と現在の見解との比較⁽⁷⁾

表 1 を見れば一目瞭然であるが、1930 年代に羅香林が考えていた客家の分布及び割合と、現在の見解⁽⁸⁾とはかなり差がある。特に、博白県と陸川県は、現在こそ 60% を超える最大の客家居住区であるとみなされているが、羅香林は、その半数しか認めていない。逆に、藤県、象州県のように、羅香林の見積もりが、現在のそれを上回っている事例も見られる。

それでは、なぜ客家の人口や分布をめぐるデータに大きな差ができてしまうのか。まず、羅香林が広西省まで直接調査に赴いていなかったため、「正確さ」に欠けていた可能性を

(7) 羅香林『客家研究導論』上海文芸出版社 (128 頁) を参照して筆者作成。現在の見解は、鍾文典『広西客家』から引用した。

(8) 鍾文典『広西客家』広西師範大学出版社を参照。

挙げることはできるだろう。羅香林がどのような根拠と基準に基づいて広西省の客家を認定していたのか、彼らの著作では明確に描かれていない。だが、羅香林の見解が現在のそれと大きく異なる理由について、彼の調査不足だけに求めることはできないかもしれない。なぜなら、後述の通り、広西省で客家を自称する人々のなかには、客家語を話せず、現地の広東語系話者と変わらない習俗をもつ者も少なくないからである。また、彼らは、1980年代に改革・開放政策が始まるまで、必ずしも客家としての自己意識を抱いていなかった。つまり、誰を客家とみなすのかは、その基準の設定のあり方によって臨機応変に変わり得る。

2. 玉林市における客家意識

玉林市は、広西省の東南部に位置しており、南は広東省湛江市と隣接する。同市は、都市部の玉州区の他、博白県、陸川県、興業県、容県、北流市を管轄している。そのうち、客家が集中するのは、上述の通り、博白県と陸川県であり、その他の県で客家が占める割合は20%に満たない。玉林市全体からすれば、マジョリティであるのは広府系に属する玉林人である。玉林市の絶対的多数は、広府系か客家系に属する漢族であるが、興業県にはチワン族の村がある。今回、筆者は国学院大学の渡邊欣雄教授、玉林師範大学の陳碧准教授とともに、博白県、陸川県、玉州区の漢族地域を訪問し、客家とそのエスニック・バウンダリーについての調査をおこなった⁽⁹⁾。

(9) なお、3月4日午前に興業県山心鎮のチワン族村でも簡単な聞き取り調査をおこなった。ここの村民が説明するところによると、彼らの祖先は山東省から来たと言われ、昔から信じられてきたという。

そのうち筆者が主な調査地とした博白県と陸川県は、玉林市の南部、広東省寄りに位置する。上述の通り、この2つの県は約3分の2が客家系漢族であり、残りの約3分の1が広府系漢族となっている。ここで話される客家語は、広東省梅県の客家語と少し異なるが、意思疎通はとれる。だが、広府系漢族が話す玉林語は、広東語の一系統とはいわれるが、香港や広州市で用いられるそれとは、かなり異なる。筆者は香港や広州市の広東語はおおよそ聞き取ることができるが、玉林語のそれは全く聞き取れなかった。特に、博白県では、玉林語は「^〇ティールウフフ」^〇ティールウフフと呼ばれており、その話者は客家側からは「^〇ティールウ」^〇ティールウ、あるいは差別的な意味を込めて、「^〇ティールウグイ」^〇ティールウグイと呼ばれてきた。

このように、博白県や陸川県では、2つの異なった方言が存在しており、特に南部の農村部では、昔から客家語が優勢であったという。だが、少なくとも1980年代までは、玉林市区に近い北部では、むしろ「地佬話」が優勢であった。例えば、博白県出身の客家であるX氏（40歳代、A氏宗族の有力者）によると、北部に位置する博白県城は、1980年代まで「地佬話」の飛び交う都会的な場所だったのだと語る。彼は、昔を回顧しながら次のように語った。

「私が中学・高校に博白県城に来た時、ここでは地佬話が主に話されていた。当時（1980年代）は、地佬話と言えば都市の言葉であり、それを学んで話すのが都会的なスタイルであった。しかし、2000年に入った頃から県城の様子は一変した。1990年代に農村の客家が県城に入りだすと、客家の勢力が次第に強くなった。また、博白県の政府高官や裕福な商人も客家で占められるようになった。今や県城では客家語が権威を

もつようになり、地佬話を話していた者も客家語を話すようになった。地佬話と客家語の双方使える者は客家語を使うようになり、また彼らのなかには客家を自認する者まで現れた。

実際、博白県の県城およびその周囲を歩いてみると、客家語が優勢であり、例えばここの出身である言語学者・王力もまた客家であると説明されている。しかし、王力の出身村の人々は地佬話も話すことができるだけでなく、かつては地佬話を主に使っていたのだという。

こうした例は、博白県では至るところで見られた。たとえば同県頓谷鎮のB氏一家は、「地佬話」を話し、父母も祖父母も「地佬話」の話者であったにもかかわらず、自らを客家であると認識していた。そこで、この一家の祖先がどこからやってきたのか尋ねたところ、一家の老人は、安徽省が彼らのルーツであると答えた。彼らの語りには、客家の移住ルートとして知られる、寧化、梅県といった地名は出てこず、祖先が安徽省からどのように博白県に辿り着いたのかも分からないのだという。筆者が広州市で調査した時、やはり祖先が安徽省から移民してきたと主張する広東語話者に幾度か遭遇してきたが、彼らはいずれも客家ではなく広府系漢族を主張していた。だが、B氏は同じ条件であるにもかかわらず、客家を主張していた。

同様の例は、陸川県にも存在していたが、特に興味深いのは、同県新城のC氏の事例であった。ここでは、玉林語を「白話」と呼んでおり、C氏が祖先代々日常的に話してきたのも「白話」であった。だが、彼らのアイデンティティを聞くと、B氏と同じく、客家であった。B氏の事例と同様に彼らのルーツを聞いたところ、ここの老人は、彼らの祖先が江西省の

「珠機巷」からやってきたのだという。実際にC氏の族譜を見せてもらおうと、彼らの始祖は江西省吉安府西門珠機巷の出身であると記載されていた。

筆者は広東省で長年調査をしてきたが、C氏の事例には驚きを隠せなかった。なぜなら、東南部では一般的に、江西省吉安府や珠機巷から嶺南に移住した漢族は広府系である、とみなされているからである⁽¹⁰⁾。C氏の場合、珠機巷から博白県に移住しており、また広東語系統の言葉を祖先代々話している。それゆえ、観察者の眼からすれば、彼らは明らかに広府系漢族であった。にもかかわらず、彼らは客家としての自己認識をもっている。

では、なぜ彼らが客家と自認しているのかについて、ある老人の語った一言は印象深いものであった。つまり、この地において「白話」を話す者は遅れて移住してきたので、彼らは「客」であるのだという。つまり、彼らは、「広東省・福建省・江西省の境界地区から移住してきた客家語話者」という現代的な客家観ではなく、遅れて移住してきた外来者（すなわち「客」）とみなしていたのである。さらに、外部から学者や政府関係者がやってきて、彼らが客家であると言いだしたことも、彼らが客家アイデンティティを獲得する契機となっていた。彼らは大夫弟と呼ばれる集合住宅に住んでおり、その形状は、代表的な客家建築とされる^{いおく} 囲屋もしくは^{いりゅうおく} 囲龍屋に似ている。また、住民に「客」意識があったので、^{いおく} 囲屋建築に住む客家というイメージをつくりだすことで、地元政府は、ここの観光化を進めようとした。こうして、彼らは、「客」だ

(10)河合洋尚『相律する景観——中国広州市の都市景観再生をめぐる人類学的研究』東京都立大学提出博士論文、2009年、60頁。

けでなく、現代的な客家としてのアイデンティティを獲得するようにもなっていた。

これらの事例に見られるように、博白県や陸川県における客家としての自己意識は、近年創られた側面が往々にしてある。博白県で筆者をアテンドしてくれた先述のX氏は、自身もまた最近になるまで自身と自身の一族が客家であることを知らなかったのだという。X氏によると、現在でこそ玉林市全体で客家という言葉は広く行き渡っているが、1980年代になるまで博白県の多くの住民は、客家という言葉を知らなかった。それまでは自身を「^{ジガニン}自家人」または「^{ゴンノガイワニン}講僱話人」などと呼んできたのだという。X氏と彼の一族（A氏宗族）・友人が自らを客家であると知ったのは1990年代であり、この頃、政府が標準中国語の普及活動を展開した時、自らの方言集団が客家と呼ぶということを教えられたのだそうだ。

このように、1980年代以降、客家という概念が玉林市に導入されるようになり、それ以降、ここの少なからずの住民が客家としての自己意識に目覚めるようになった。A氏は、客家語を話し、江西省南部の安遠県から移住したという伝承をもつので、「広東省・福建省・江西省の境界地区から移住してきた客家語話者」という現代的な客家観を抵抗なく受け入れることができた。ただし、B氏やC氏のように、広東語系統の言語を話し、広東省・福建省・江西省の境界地区にルーツをもたない一族までもが客家としての自己意識を喚起していることは、注目に値する。C氏の場合、その要因となったのが「客」意識であり、また、囲龍建築の住民＝客家と決めつけるステレオタイプの客家文化像であった。

X氏が述べていたように、かつての博白県では地佬話に都

会的なイメージが付与されていたが、現在では、客家語に権威が与えられるようになっている。特に、2006年11月に博白県政府の主催で「第一回客家文化節」を開催して以来、博白県と陸川県は、客家をブランドとして地域開発をする戦略を開始している。こうした社会政治的な状況のなか、客家語を話し、客家を名乗ることは、現在、政策的・経済的な側面でもプラスに働くようになっている。

3. 玉林市における客家文化

近年、客家系漢族と広府系漢族のエスニック・バウンダリーは変化しているが、両者には所属意識の上での区別があることは確かである。博白県や陸川県では、客家語と玉林語の双方を話せる者は少なくないが、所属意識のうえでは「客家系でもあり広府系でもある」と答えた者はおらず、二者択一で回答していた。では、客家系漢族と広府系漢族は、文化の上でどれだけ差異を互いに認めているのだろうか。この問題について、まず年中行事について見ていくとしよう。以下に挙げた表2は、東平鎮のA氏宗族から聞いた彼らの年中行事の内容である。

日	行事名	内容
旧暦 1 月 1 日	初 一	何もしない。素食を食べる。
旧暦 1 月 2 日	開 年	獅子舞など、活動を開始する。
旧暦 2 月 15 日	元宵節	「儉菜」をすることがある。
旧暦 2 月 2 日	龍抬頭	東平鎮ではなく、他の鎮で龍舞をおこなう一派もいる。
旧暦 2 月 16 日	春 祭	祠堂で祖先祭祀をおこなう。

旧暦 3 月 3 日	三月三	(これは少数民族の祭りであるから漢族である A 氏はやらない)
新暦 4 月 5 日	清明節	個々の祖先の墓参りをする。
旧暦 5 月 5 日	端午節	祖先崇拝をするが、ドラゴンボート・レースはやらない。
旧暦 7 月 15 日	鬼 節	祖先供養をする。
旧暦 8 月 16 日	秋 祭	祠堂で祖先祭祀をおこなう。
新暦 9 月 9 日	重陽節	祠堂で個別に祖先祭祀をする。
新暦 12 月 22 日	冬 至	特に何もしない。

表 2 : 博白県東平鎮 A 氏の年中行事

表 2 を見れば一目瞭然であるように、A 氏の年中行事は、東南部の客家はもちろん、他の漢族と比べても大差ない。A 氏は春祭と秋祭を非常に重視しているが、広東省梅県でもこれらの祭りを盛大におこなう一族はある。おそらく東南部の客家地区と比べて比較的珍しいのは、元宵節に行く「偷菜」、および旧暦 2 月 2 日に東平鎮の外に住む分家が行う「龍抬頭」の習俗であろう。前者は、「菜 choi」が「財 choi」と同音ということにあやかり、この日に（暗黙の了解のもとで）隣人の畑から野菜を少し盗む。他方、後者は、雨を司る龍王を祀る日であり、龍舞をしながらパレードをして年内に十分な雨が降るよう祈願する祭りである。だが、この二つの行事は現地特有の客家文化であるのかどうかというと、そうでもない。この二つの習俗は博白県、陸川県、玉州区の広府地域にも存在するからである。

実際、A 氏に「あなた達の年中行事は地佬たちのそれとどこが違うのか」と聞いても、皆「基本的には同じ」と答えて

いた。唯一の違いを強調されることがあったのは、表2のように年一回するのではなく、季節の折り目の旧暦8日に催されるという「做社」という儀礼であった。A氏一族の話によると、「做社」は、木の下にある土地伯公を拝み、米や豚などを供えて村中の平安を祈る大きな儀式で、同地の地佬語話者はそれをしないのだという。ただし、玉州区永上村のある広府系漢族村では、毎年旧暦4月6日に「做社」を盛大にするので、実際には客家だけの習俗とはいえない。現段階では、玉林市の客家系漢族と広府系漢族の間に、決定的な差異を見出すのは難しい。

しかしながら、その一方で、現在の玉林市には、客家を資源として経済発展を促そうとする動きがある。こうした動きのなかで、客家の多い博白県や陸川県の有名な特産物を、客家の名のもとで売り出していこうとする戦略が採択されるようになってきている。たとえば、陸川県で有名な豚足、蛇酒、鍋などは、陸川客家商会の会館でも並べられるようになっており、客家の名のもとで宣伝され始めている。また、陸川県の観光名所である謝魯山庄では、山歌などの芸能、および地元の料理が、客家文化として看板に表記されていた。

現在、玉林市で客家文化産業の最大のターゲットとなっているのは食である。言い換えれば、食は、玉林市における客家らしさを醸し出す最も重要な資源の一つとなっている。では、玉林市では、何が地元の客家料理として提示されているのだろうか。上述の陸川豚足の他、玉林市で客家料理として提示されている料理のいくつかは、非常に興味深いものであった。まず、玉林の代表的な料理として「豚肚鶏包」という鶏を入れた火鍋があるが、これは客家だけが特に食す料理で

はないため、何を根拠に客家を語っているのか理解に苦しむものであった。次に、玉林市で客家料理として宣伝されている料理には、「白切鶏」（鶏のスチーム）や「牛雜」（牛の様々な部位と大根をおでんのように煮る）があり、それぞれ「客家白切鶏」「客家牛雜」など客家の二文字を頭につけて売り出されることもあった。だが、この二つの料理は、広東省や香港では広府料理とみなされる傾向が強く、広州では代表的な広府料理として売り出されることすらある⁽¹¹⁾。

以上の食の事例のように、東南部では広府系漢族の文化であるのに、西南部では客家の文化になるという「文化の逆転現象」は建築の面でも見られた。例えば、広東省では、青レンガの壁、横木の門、そして耳の如く丸く突出した屋根（広州市近郊では「フオイチョン鑊耳壁」と呼ばれる）は、いずれも広府建築の典型的な構成要素であるとみなされている⁽¹²⁾。しかし、博白県や陸川県では、客家の建築として紹介された建築の多くに、これらの建築パーツが見られた。（巻頭カラー写真 2 頁上段「博白県の客家建築に見る青レンガの壁と鑊耳壁」参照）

また、東南部では客家文化とされている囲屋建築が、玉林市では広府系漢族の住居であるという、逆の認識も見られた。例えば、玉州区の北郊外に位置する高山村を初めて訪れたとき、筆者はここが客家村でないかと思った。というのも、彼らは、玉林語を話してはいたけれども、祖先が山東省（つまり中原）より南下していたことを強調していたし、何よりも彼らは客家の「故郷」として有名な梅県の客家建築——囲龍

(11) 河合洋尚「都市化と食景観の創造——広州の広東料理」河合利光（編）『世界の食を学ぶ』時潮社、2011年、123-143頁。

(12) 河合洋尚『相律する景観——中国広州市の都市景観再生をめぐる人類学的研究』東京都立大学提出博士論文、2009年、第4章。

屋に似た集合住宅に住んでいたからである。しかし、彼らには客家としての自己意識はなく、自身を「住屋人家」と称していた。同行した陳壁によると、現地において「住屋人家」は、広東語系漢族に相当する表現なのだという。

「何が客家文化であるのか」という認識は、東南部と玉林市では異なっている。このことは、博白県東平鎮松洞村の義民廟の事例に端的に現れていたように思う。この地には、「義勇祠」と呼ばれる義民廟があり、それを管理しているA氏の老人が言うには、太平天国の乱およびその前の天地会の抗争で死去したA氏内外の者を、葬って祀ったものである。義民廟およびそれにまつわるストーリーは、言うまでもなく、台湾を始めとする東南部では、客家の文化として説明されるものである。しかし、A氏には、これが客家文化だという意識は存在していない。つまり、東南部で典型的な客家文化とされているものが広西省の地にあるにもかかわらず、それは客家文化として表象されていないのである。客家文化政策が進む博白県で、この義民廟は後に客家文化として「発見」される可能性もあるが、現在は、まだ東南部における客家文化表象と接続されていない。(巻頭カラー写真2頁下段「義勇祠の殿内で祀られている戦死者の位牌」参照)

4. 帰国華僑の語りとの比較

これまで、玉林市における客家系漢族のアイデンティティと文化について、広府系漢族との比較から述べてきたが、彼らはいずれも同市で生まれ育った、いわば土着住民である。しかし、玉林市の客家について論じる際に注意しなければならないのは、この地には、外部から移住してきた客家も存在

しているということである。特に、玉林市は、華僑の輩出地としても知られており、なかには海外の華僑社会から戻ってきた帰国華僑も居住している。彼らは、同じ客家系漢族と言っても、人生経験や文化のうえで土着住民とは異なっている。筆者は、インドネシアから帰国し玉州区に住んでいる数名の客家華僑から話を聞くことができたので、ここで簡単な比較をしておきたい。

中国人が中国南部から東南アジアに移住した歴史は、少なくとも唐代に遡ることができるが、王廣武が言うように、移住が劇的に増加したのは 19 世紀半ば以降のことである⁽¹³⁾。筆者がインタビューした D 氏（60 歳代）の祖父母が広東省揭陽市からインドネシアのスマトラ島に移民したのも 19 世紀であり、彼女は、中国人ではあったが、家庭と中華学校以外ではインドネシアを使い、また、インドネシア化した中華料理（プラナカン料理）を食べていた。他方で、E 氏（60 歳代）の父母は広東省梅県からインドネシアのジャワ島に移住したが、同じ中国人同士でも方言が異なる場合は、インドネシア語で会話していたのだという。彼らは、幼少期から華人学校で勉強し、標準中国語も勉強してきたが、インドネシアで華人排斥の動きが強まるにつれ、華人学校が閉鎖され、勉強する場を失った。そこで、1960 年、D 氏は 11 歳、E 氏は 14 歳の時に家族とともに広州市の黄埔港を經由して、中国に帰国した。

当時、インドネシアから帰国した華僑は、卒業後、華僑農場や華僑林業に配属されるケースが多く、D 氏と E 氏はとも

(13) Wang, G. W. "The Origin of Hua-Chiao," In G. W. Wang (ed.) *Community and Nation: China, Southeast Asia and Australia*. Allen and Unwin, pp.1-10

に柳州市柳城にある華僑農場で働いた。彼らが柳城の華僑農場を選択したのは、単に都市に近い華僑農場に行きたかったというだけの理由からだという。彼らがインドネシアに行く前、聞いていた中国のイメージは非常に美しく、B氏の父親などは中国に行くのが夢であった。だが、実際に中国に戻って柳県に住んでみると、騙された気分一杯になり、一日でも早く中国を離れたかったのだそうだ。現に、1979年に改革・開放政策が始まり、出国が許可されるようになると、D氏とE氏の家族の大半は香港に移住した。もともと彼らも香港への移住を申請したが、政府からの許可が下りず、華僑農場を離れて玉林市に移住してきた。そこで、どのような点で現地への適応に苦しんだのか尋ねると、E氏は、気候と隔離の2点を挙げた。

E氏によると、彼らは同じ客家と言っても、インドネシアで生まれ育っているため、食べる物も着る服も異なる。彼らは、インドネシアの料理に慣れており、客家ではあるが広西省の客家料理には慣れ親しんでいない。だが、彼らの説明では、食への適応はそれほど困難でなかった。香港に移住した家族に食材を買ってきてもらい、自分でナシゴレン、アヤムゴレン、サデー、カレー、カドカドなどを作ることもできるからだという。しかし、インドネシアは暖かかったので、広西省の寒い冬だけは耐え難かったとE氏は語った。

だが、E氏が中国で耐え難かったのは、気候の問題よりもむしろ社会的な待遇の方であった。彼らは、同じ中国人であるにもかかわらず、華僑として土着住民から隔離され、華僑農場の農民として土地に縛り付けられた。また、海外に親戚がいるという理由から、文化大革命が起きると攻撃的にな

り、資産階級として警戒された。生活は保障されていたので土着住民から羨望の眼差しで見られることはあったが、異なる集団として見られ、通婚どころか日常的な接触もあまりなかった。

E氏が当時を振り返って言うには、彼らが客家であるという身分は、何も役にも立たなかった。まず、E氏はインドネシアにいた頃から客家としての自覚があったが、広西省で同じ方言を話す者には、最近になるまで客家としての自己意識がなかった。次に、彼らが同じ客家であることを教えようにも、地理的に隔離されていたため、土着住民と親交を築く機会が限られていた。最近でこそ客家が現地社会で着目されるようになってきているが、当時は、客家であるか否かということとは重要ではなく、帰国華僑であるか土着住民であるかという区分の方が分かれ目になっていた。E氏は、「帰国華僑と土着住民の間にはそれほど溝があった」のだと強調するのであった。

以上の語りを本稿の関心から捉えなおしてみると、主に2つの興味深い事実が浮かび上がってくる。第一に、玉林市の客家は一様ではなく、帰国華僑が歩んできた人生、および生活習慣は、それまで自身を「[○]自家[○]人」などと称してきた土着の客家系漢族と異なっている。彼らは、香港、インドネシアなどと境界を越えたネットワークを紡いでおり、たとえば外部から食材を送ってもらうことで食文化への適応も果たしている。第二に、玉林の土着住民が客家としてのアイデンティティを獲得したのが最近であるのに対し、帰国華僑であるE氏らは、すでに1960年代以前から客家としての身分を知っていた。しかし、以前の広西省では客家であることが社会的に

認知されておらず、それゆえ彼らは客家という絆によるネットワークを構築するに至っていなかった。帰国華僑による語りからは、広西省における客家の文化とアイデンティティを、より複眼的な視線から捉えていくべきということを教えてくれる。

5. 要約と展望

以上、玉林市におけるフィールドワークを通して、広西省における客家のアイデンティティと文化について若干の記述と考察をおこなった。本稿は、短い調査期間で得られたデータを前提とはしているが、現時点で明らかになったことを要約すると次のようになる。

- ① 広西省において誰が客家であるかは変動しうる。また、客家への自己認識は帰国華僑の方が早い。
- ② 客家系漢族と広府系漢族の間のアイデンティティの揺れ動きには、近年の客家文化政策が関連している。
- ③ 一般的に、客家系漢族と広府系漢族の文化の差は明確には認識されていない。
- ④ しかし、客家文化産業の推進により、食文化をはじめとする一部の文化要素が、客家のものとして宣伝され始めている。
- ⑤ ただし、玉林市で客家文化とされているものは、往々にして地元の特産品である。
- ⑥ したがって、東南部の客家文化と接続する作業がまだ乏しい。
- ⑦ それにより、珠機巷、白切鶏、牛雜といった東南部では広府文化の代表とされるものが、広西省では客家文化のシン

ボルとなる「文化の逆転現象」が生じている。

本稿で提示した要約は、あくまで玉林市の数か所で実施した聞き書きから導き出されたものにすぎない。今後、玉林市内や広西省の他の地域にも調査の手を広げることで、上記の要約を、再確認あるいは再考していく必要がある。また、本稿で示した事例は、2012年3月という特定の日時において実施したものであるから、時間の経過により本稿で提示した見解は変化しうる。特に、先の要約⑥で示したように、現段階では、東南部の客家文化の接続が一部にとどまっているが、今後、東南部の客家地域と共通する文化要素が、玉林市および広西省で次々と「発見」されていく可能性がある。

言うまでもなく文化は変化するものであり、現在、広西省における客家のアイデンティティと文化は一連の政策的影響を受けて、変動の渦中にある。このような状況のなかで、本稿で挙げた事例がどのように変化していくのか、その権力的プロセスを読み解いていく作業が、今後必要になっていくであろう。

付記：本稿では、客家語のルビに○印を、広東語のルビに●印をつけた。本稿で調査の対象とした玉林市の広府系漢族は正確には、香港や広州市で話される標準広東語ではなく、独自の玉林語を操る。だが、彼らは玉林語を解さない筆者のために標準広東語で話していたので、後者を用いてルビをふった。

(作者：日本・国立民族学博物館機関研究員、
中国・嘉応大学客家研究所客員准教授 社会人類学博士)